

不妊症に対する高校生と大学生の意識調査

06418526 小寺菜見子 指導教員 中塚幹也教授

【緒言】

現在、日本の10組に1組の夫婦が不妊症であると言われている。不妊症の原因として、性感染症など思春期に発生しているものもあるが、高校生や大学生が、どのように意識を持っているかは明らかではない。今回、高校生・大学生を対象に「生殖に関する意識」を調査しその背景を検討した。

【方法】

岡山県内の1高校、2大学の在学学生931名を対象に、自己記入式質問紙による調査を行った。統計学的解析には、 χ^2 検定を用い、p値0.05未満を有意、0.1未満は傾向とした。

尚、調査は無記名で行い、個人が特定されないように回収した。本研究は、岡山大学医学部保健学科倫理委員会の承認のもと施行した。

【結果】

● 生殖に関する認識

生殖に関する認識は、97.9%の人が不妊症を知っていた。「自分が不妊症であれば子どもをあきらめるか」に対しては、74.6%が「あきらめない」と回答したが、代理出産や死後生殖を利用して子どもを持ちたいと回答した学生は各50.5%、54.2%であった。

男性と女性とで比較すると、「将来、自分が不妊症になる可能性があると思う」との回答は、男性の方が有意に低率であった。

また、高校生と大学生とで比較すると、高校生の方が「将来、自分が不妊症になる可能性があると思う」との回答が有意に低率であった。「不妊症の人は何か大きな病気をしたためだと思う」との回答は、高校生が17.3%、大学生が10.3%であった。

● 不妊症につながる原因の認識

不妊症につながる可能性のある原因として、「性感染症にかかること」、「妊娠中絶を行うこと」、「極端なダイエット」を挙げた学生が多かった。

男性と女性とで比較すると、女性の方が「妊娠中絶を行うこと」、「極端なダイエット」が不妊の原因となる可能性があるという回答した比率が高かった。

高校生と大学生とで比較すると、大学生の方が全ての項目で有意に高率であった。

● 生殖に関する認識とその背景

「将来、結婚したい」と回答した学生は、「自分

が不妊症であっても子どもをあきらめると思う」との回答が有意に低率であったが、「代理出産」には否定的であり、「死後生殖」には肯定的であった。

「命の大切さに関する授業を受けたことがある」と回答した学生は、「子どもを育てられないのであれば、妊娠中絶も仕方ないと思う」の項目では有意に高率であり、「致命的でなくても先天異常の子どもであれば、妊娠中絶も仕方ないと思う」、「子どもを育てられないのであれば『赤ちゃんポスト』に入れて立ち去るのも仕方ないと思う」では低率であった。また、「将来、結婚したい」、「将来、子どもが欲しい」、「子どもはかわいいと思う」と回答した学生は、3項目とも低率であった。

【考察】

● 生殖に関する認識

生殖に関する認識では、男性や高校生の不妊症に関する認識が低く、また、不妊症になる可能性をあまり感じていないことが明らかになった。正しい情報を提供し不妊症への認識を深める必要がある。

● 不妊症につながる原因の認識

不妊症につながる原因の認識は、高校生と大学生とで比較すると、大学生のほうが認識度が高かった。中でも医療系大学の大学生の方が高く、非医療系大学でも認識を深める必要がある。

● 生殖に関する認識とその背景

「子どもが欲しいかどうか」よりも「結婚したいかどうか」の項目が、より「死後生殖」の肯定感と関連していた。「死後生殖」への肯定感には子どもを持つことよりもパートナーとの関係性を保つという因子の方が大きく影響していると考えられる。

また、「妊娠中絶」や『赤ちゃんポスト』の利用に関する考え方には、「命の大切さに関する授業(性教育)」のみならず、日常生活の生活習慣も大きく関与していることが考えられる。このような観点をふまえて性教育を進めていく必要がある。

【結論】

今回の調査で「命の大切さに関する授業」を受けたことのある学生は97%と高率であったが、必ずしも不妊症に関する正確な情報は得られていなかった。性教育の中で、妊娠や不妊に関して早期から考えることが必要である。また、これは単に学校の授業に留まらず、日常生活における生活習慣とも大きく関与していることが明らかになった。このような観点から、性教育を進めていく必要がある。

